『吉屋信子論』　要旨

山田昭子

第一章「吉屋信子、その<少女性>―童話から少女小説へ」は、これまで経歴の一部としてしか語られず、自立した研究の対象とされることはなかった吉屋の童話作品について論じる。吉屋童話の全容を把握し、掲載時期を同じくする『花物語』との連関を見るものである。同時進行であった童話と『花物語』が、どこで分岐し、吉屋は『花物語』の世界を選び取っていったのか、「黄金の貝」「二つの貝」「桜の島」という三作品から読み解いていった。

第二章「「睡蓮」論―『花物語』における少女たちの裏切り―」は全五十二話とされる『花物語』の中でも、少女の裏切りを描いた「睡蓮」について述べるものである。「睡蓮」掲載時、時代は少女像の変遷の一転機を迎えていた。それが作品内において寛子の仁代に対する「裏切り」という形で「夢想的少女」が否定される構図と重なったといえる。本作は芸術の道を志す少女が登場する物語であり、『花物語』には他にも同様の少女が登場しているが、仁代の持つ芸術性がいかなるものであったのかについても考察した。

第三章「「少女倶楽部」における運動小説について」は第二章の「睡蓮」論から派生したものである。「睡蓮」の掲載当時、掲載誌である「少女倶楽部」には「運動小説」という新たなジャンルの誕生があった。そこには競い合う少女たちが描かれている。二つは芸術と運動といった、一見位相の異なる二つの世界であるかもしれないが、体育と芸術は文化という枠組みの中で一体であるべきものであるという指摘があることは看過できない。「睡蓮」が登場する背景には、既に「少女倶楽部」誌上において競い合う少女たちの下地が用意されていたということを一つの可能性として導き出した。

第四章「『からたちの花』論」では、『花物語』の連載に一旦の終了を見た吉屋が迎えた転機に着目すると同時に、『花物語』所収の「心の花」と設定を同じくする『からたちの花』が、どう変わっていったのかを見るものである。昭和初年の渡欧体験とそこで得た一冊の本との関わり合いを通して、『からたちの花』が以降の吉屋作品の中で果たす役割について考察した。

第五章「「新しき」ボルネオ論」は、昭和十七年に発表された『新しき日』に登場する『風下の国』を契機とするものである。吉屋が「主婦之友」の専属特派員となったのは昭和十二年のことである。蘭印、仏印に赴いた吉屋は、帰国後の昭和十七年『新しき日』を執筆している。吉屋はそこにアグネス・キース『風下の国』というボルネオを舞台にした一冊の本を登場させた。ボルネオという土地に関わった、林芙美子、築地藤子といった女性作家たちにも触れ、インターテクスチュアリティとしての『風下の国』を通して『新しき日』を読むことで、ボルネオという土地に関わった作家の一人としての吉屋を捉えていった。

第六章「『安宅家の人々』論」で扱った『安宅家の人々』は、昭和二十六年に書かれた作品で、夫婦の性にまつわる困難を扱った作品である。

安宅宗一という「精神薄弱者」の良人と、その妻国子を描いた吉屋は、その十年後の昭和三十六年、『女の年輪』で、「精神薄弱者」の妻とその良人の物語を描いている。吉屋作品において「母」は重要なキーワードの一つであると同時に、本作は戦前の代表作『女の友情』や『良人の貞操』に描かれた女の友情というテーマを引き継ぐものである。この物語における友情の物語は国子と雅子の間に生じているが、母をめぐる女同士のねじれた関係性は、どこへ帰着するのか。三人の関係性から読み解いていった。

第七章「『香取夫人の生涯』論」で扱った『香取夫人の生涯』は完全なる評伝作品ではな

く、手記を下地にしながら一人の妃殿下を創作した、いわば準創作作品であるといってよい。本作は、創作と評伝作品とを繋ぐものであり、『香取夫人の生涯』を書くことで、吉屋はのちの『女人平家』『徳川の夫人たち』の着想を得ていく。その意味では、『香取夫人の生涯』は決して見逃すことのできない作品である。本章では現在確認できる伊都子の手記から、吉屋が手にしたと思われる伊都子の手記について考察し、資料的価値についても見出した。